

巻 頭 言

30 年の激変，次の打ち手は何か？

黒川 清^{*,**}

30 年前の透析医療をめぐる状況，社会の情勢は，今とは相当に違っていた。日本全体に活気があり，自信があった。後でわかるのだがバブル経済で，「イケイケどンドン」「ジャパン・アズ・ナンバーワン」といわれていた。

『腎と骨代謝』の領域ではビタミン D，PTH，骨代謝の研究の成果もあり，透析患者のケアは大いに向上した。これが後に CKD-MBD の概念の登場，骨代謝を改善する各種新規薬剤の開発につながっていく。1990 年代にはエリスロポエチン製剤の導入，国際腎臓学会の日本開催をはじめとして腎・透析分野の活動は欧米・アジアと国際的交流も大きく，急速に広がり始めた。

透析で特筆すべきは 1996 年に始まった DOPPS だ。日米欧での透析患者のデータを「ひたすら」集め，多角的な国際比較分析が始まる。日本の透析医療は優れていると，関係者の自信も高まった。DOPPS は今様にいえば「ビッグ・データ」研究の始まりだったし，新しい臨床研究の能力をもった医師たちが生れ始めた。

しかし，日本の勢いに「かげり」が見え始めた。1989 年の冷戦の終結，http，www 開発などに始まるネットのつながりでヒト，モノ，カネ，情報が急速に世界を駆け巡る「グローバル化」が始まる。1995 年ごろから 20 年，日本経済は GDP の成長も，一人当りの GDP の値も低迷している。世界トップクラスだった国民一人当りの GDP は，いまや 25 位あたりにまで下がっている。

* 日本医療政策機構（〒100-0004 東京都千代田区大手町 1-9-2）

** 東京大学名誉教授

1995年の出来事は象徴的だった。1月は阪神・淡路大震災と手抜きゼネコン工事発覚、今の築地市場の豊洲移転問題、東京オリンピックでも同じ構造の政治と自治体の統治のありさまがあらわになったが、3月は地下鉄サリン事件と「偏差値知性」の劣化、4月から野茂がメジャーに、これが「組織・団体の掟」より「個」の選択の象徴なのだが、秋から冬は住専救済へ巨大な（約7,000億円）政府による資金投入、一度外れたタガを戻せない政治、その後三菱銀行と東京銀行の合併。今の日本のありさまのプラスもマイナスもこのころに明確な形で現れはじめたのだ。

このころから透析患者の原因疾患の第一位は腎炎から糖尿病性腎症になる。阪神・淡路大震災の透析医療の経験は、16年後の東日本大震災・福島原発事故の際にはその教訓が生かされた。

「グローバル化」は加速する。「ネット」の指数関数的 Exponential「進歩」、成長しない「先進国」の経済、拡大する貧富の差、そして今やAI（人工知能）がチェス、将棋、そして囲碁でも人間に勝つ時代だ。

社会のありようは急速に変化している。それはグローバル世界の分断、高齢社会、そして国内外の経済のありようだ。

高齢社会では患者ばかりでなく、医療提供側も高齢化という同じ問題を投げかける。しかも、経済先進国の経済成長は弱く、金利は低い、貧富の格差は広がっている、年金・社会保障の財源、高騰する医療費などなど、大きな社会的課題が山積している。不安定な社会の様相がここかしこに表れている。さらに、高齢者では、年齢とともに一定の割合が認知症となるが、この対策はどうなのか。

このような世界が来るとは、誰が30年前に予想していただろうか。これは私たちみんなの問題なのだ。次の「打ち手」もまた、みんなで考えていかななくてはならないのだ、この国の将来を見据えて、将来のために。